
日本英語学会第10回年次大会記

武内 道子

この秋日本英語学会は創設10周年を迎えた。これを記念して11月7日と8日に東京外国語大学にて開かれた年次大会は、盛況にして、特色あるものとなった。ここで、10年というタイムスパンに立って本大会の特色を述べてみたい。

まず、昨年の第9回大会に始まり、今年第2回目のワークショップの報告から始めたい。大会初日の午前中(9:30-12:00)に企画されたこのワークショップは、昨年予想以上の盛況をそのまま受け継いで、6つから7つにプログラムが増え、いづれも活発な討論が行われたということである(七室に発表者は45人を数えた)。私は井谷 玲子氏と共同で応募し、採用され「関連性理論—より説明力のある語用理論を目指して—」というタイトルでワークショップをもった。大阪の四天王寺仏教大学の山崎 英一氏に加わってもらい、慶應大学の西山 佑司氏をコメンテーターに迎えた。80部用意したハンドアウトがすぐなくなってしまった。論文発表者を公募せず、三人だけで関連性理論という一つの有機的理論の目指すものと方法が、全体像としてできるだけ見えるようにと心を砕いて、4月以来準備してきた。

三人の発表論文のタイトル(発表順)は次の通りである。

関連性理論の輪郭：武内 道子

関連性理論の枠組を使って(1)—解釈的用法としてのか：井谷 玲子

関連性理論の枠組を使って(2)—条件文の位置づけ：山崎 英一

5月と9月と10月にまとめ役として(当日は司会を兼ねた)私は、大阪に山崎氏を訪れ、ディスカッションをもった。電話によるやりとりは十数回に及んだであろう。下阪の一回は言語センターから旅費をいただいたことを記して、謝意を表したい。

10周年を記念する事業の一環として、海外から二人の学者を招いて特別ワークショップ(第一日午後)と特別講演(第2日午後)がもたれた。一人は40歳という若さでジュネーブ大学言語学科長をつとめるルイジ・リッツィ氏。統語論、ロマンス語学専攻で、原理とパラメーターによるアプローチの今日の生成現論の基礎を築いた人である。彼の目下の主要な研究テーマの一つである心理動詞(Psych-verb)の分析に関して、4人の発表者と共にワークショップがもたれた。もう一人は、38歳のMIT脳・認知科学科教授スティーヴン・ピンカー氏で、文法獲得理論の第一人者と目される。今回のワークショップでは、項構造の獲得に関して、これまでの言語学・心理学の研究成果を駆使した注目すべき見解を発表した。また特別講演では、リッツィ氏はパラメーターアプローチの比較統語論における有用性を(“Comparative Syntax:A Parametric Approach”)、ピンカー氏は規則・不規則動詞について規則と記憶の相互作用性を(“Rules of Language”)論じた。兩人とも、現在第一線で活躍し、将来的にも大きな影響力が期待される学者で、明快でエネルギッシュな語り口とあわせて、多様な趣味をもつ千人を越す会員を引きつけた。

特別企画に伴って、本大会の研究発表は二日目の午前中のみになり、発表数をかなり制限することになった。しかし、ワークショップの45名を含めて、本大会の発表者総数は97名の多きに達し、その6割余が女性であったことは、特筆すべきであろう。東武バンケットホールでの会員懇親会もとりわけ華やかであった。二人の海外研究者、来年度からの新会長、副会長をはじめ、初代会長の安井 稔氏、唯一の女性会長の井上 和子氏が話をされた。

83年に上智大学で産声をあげた日本英語学会の10年は、そのまま日本の英語学研究の変遷と重なる。英語学会が年々質的にも量的にも充実してき

たということは、日本の英語学研究の隆盛そのものとみなしてよいだろう。隆盛のひとつに、会員の海外での活躍ということがある。海外の学会は単に参加することから、研究発表、講演がポピュラーになってきたし、海外での出版も活発である。この傾向は英語学会創設と時を同じくして始まったと思う。

二つ目にいえることは、興味の対照が多岐に亘ってきたことであろう。この学会は始めから、英語をはじめとする個別言語の実証的研究と、一般理論的研究の間にフィードバックが働いていたと思うが、どうしても統語分析中心、しかもGB理論

が巾をきかせてきたという感は否めなかった。今大会では、発表がGB理論の枠組一辺倒でなく、新しい視点に立ったものが、目立った（私たちのワークショップもそのひとつ）。理論内の異端に対する、また隣接諸分野に対する寛容さを見たように思った。

実証と理論がダイナミックにかかわりあい、相互触発的ないき方が研究の原動力であるが、既成の枠組にとらわれない自由で批判的な目と、寛容の精神が加われば、次の10年もさらに大きく発展するであろうことは間違いない。そう確信して会場をあとにした。